

創立 1986 年

2021～2022年度クラブ目標

『新たな奉仕に踏み出そう  
ロータリーの次の百年のために』

会長 鈴木 孝 幸  
幹事 須藤 正 樹



奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

2021-22年度国際ロータリーテーマ

## 第1701回例会

令和4年3月3日 (12:30～13:30)

○ソング

- 国歌 (君が代) ●奉仕の理想

○ビジター

- 公益財団法人ジョイセフ 佐藤幸子様、栗林桃乃様

○スマイルBOX

- 鈴木孝幸会長 (ジョイセフ様お世話になります。今後共よろしくお願い致します。青木国際奉仕委員長よろしくお願い致します。)
- 金田昇会員 (国際奉仕委員会の皆様、卓話設営ありがとうございました。ランドセルが有効に活用できるようですね。感謝です。)
- 永野文雄会員 (国際奉仕委員会、青木大会員、卓話ありがとうございます。)
- 大住由香里会員 (国際奉仕委員会及びジョイセフの佐藤様、栗林様、ありがとうございました。)



公益財団法人ジョイセフ

▶第1701回例会出席状況 (R4年3月3日)

Ⓐ 出席免除を受けていない正会員数	51名
Ⓑ 出席免除の適用正会員数	14名
Ⓓ 全正会員数	65名
Ⓒ ①の出席者数	24名
Ⓔ ①のメイクアップ者数	0名
Ⓕ ②の出席者数	4名
Ⓖ = Ⓒ + Ⓔ + Ⓕ (メイクアップ補填後の出席会員数)	28名
Ⓗ = Ⓓ - (Ⓑ - Ⓕ)	55
Ⓘ = Ⓖ / Ⓗ × 100 (例会出席率)	50.9%

▶例会日: 第1・第3木曜日 (12:30) その他の木曜日 (18:30～19:30)

▶例会場: 白河市新白河駅前 東京第一ホテル新白河

▶事務局: 〒961-0957 福島県白河市道場小路96-5 (白河商工会議所内) ☎23-3101 FAX22-1300

## 本日のプログラム

### ■会長の時間



鈴木孝幸会長

皆さん、こんにちは。今日もお忙しい中、ズーム例会にご出席いただきましてありがとうございます。完全ズーム例会が4度続きました。県は蔓延防止を予定どおり6日までで解除すると発表いたしましたので、来週は久しぶりにハイブリット例会を開催することにいたします。皆さんの生のお顔を拝見できることを楽しみにしております。さて、世界を揺るがせているロシアの強硬なウクライナへの侵攻ですが、残念なことに今朝の新聞報道ではウクライナの民間人の方が何人も犠牲になっておるようであります。また、ウクライナ人が近隣国に避難しているようであります。ウクライナ国内でも住む場所を失った方々が10万人を超えるような状況だそうです。現在も攻撃が続けられておまして、非常に危険な状況が続いております。沢山のお亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈りしたいと思います。さて、この状況は決して対岸の火事ではなくヨーロッパ各国、そして我が国でもいつ戦争に巻き込まれるかわからない状況であると言われております。第二次大戦終戦直前も、満身創痍の日本に当時のソ連は日ソ中立条約を破棄し北方四島を奪いました。それから76年後のこの近代社会で、同じ過ちを繰り返すという信じられないほど危険な国であります。いや、危険なのはプーチン大統領個人なのだと思いますけども、いずれにせよ今後日本の国土を守っていくためにも、至急今までと比べ物にならないしっかりと国防対策を国に実施していただきたいと私個人の意見ですが思っております。また、この状況についてロシアの攻撃から2日後の2月27日に国際ロータリーから声明が出されておりますので、ここで皆さんに読み上げてご紹介したいと思います。ウクライナ情勢に関する国際ロータリーからの声明ということで、「ウクライナと世界の人々にとって痛ましく悲惨な状況となっております。ロータリーはウクライナにおける状況悪化と人命の喪失、及び人道的苦難が深刻化していることを深く懸念しています。ウクライナに対する軍事行動が続けば、地域の荒廃を招くだけでなく、ヨーロッパと世界も悲惨な結果が広がる恐れがあります。世界最大の人道支援団体の一つとして、ロータリーは平和を世界的使命の礎としてきました。私たちは国際社会と共に、即座の停戦、ロシア軍の撤退、及び対話を通じた対立解決のための外交努力の再開を求めます。過去10年間、ウクライナ、ロシア、及び近郊諸国のロータリークラブは国の違いを超えて親善を推進し、戦争や暴力の被害者への支援を先導する平和構築プロジェクトに積極的に取り組んできました。私たちは今、この悲劇的な出来事に直面しているウクライナのロータリー会員や人々のために祈ります。国際ロータリーは援助物資や支援を提供し、ウクライナ地域に平和をもたらすために全力を尽くします。2022年2月25日国際ロータリー。」というふうな内容でございます。国際ロータリーとしても、ウクライナ地域の平和回復のために全力を尽くすとのことであります。今後、私たちのクラブでも必要とされ、かつ可能であるならば前向きに支援を検討していきたいと思っておりますし、今後ウクライナからのロシア軍の全面撤退と停戦が早く実現することを心から祈っております。さて、今日の例会は国際奉仕委員会担当例会でございます。昨年吉野年度の、ミャンマーにランドセルを送る事業がミャンマーの内戦のために、また更にコロナ禍のために実施できなくなってしまったことから、今回、青木国際奉仕委員長から我がクラブ会員の国会議員であります上杉謙太郎外務大臣政務官にご相談申し上げましたところ、今回卓話をいただくことになりました「公益財団法人ジョイセフ」様をご紹介いただいたところであります。ジョイセフ様は海外の子供たちにランドセルを寄贈する、思い出のランドセルギフトという事業を展開しておられまして、今回我がクラブで集めましたランドセルをジョイセフ様を通して、今回はアフガニスタンの子供たちに送っていただけるということになった次第でございます。大変、ご縁で今日ジョイセフ様からこの事業に関していろいろなことをお聞きできることと思っておりますので、しっかりと理解を深めたいと思っております。今後、コロナ禍が世界的に落ち着いてアフガニスタン現地の治安が安定しているのであれば、我々直接現地に赴きましてランドセルを使っていたら子供たちに会い確認したいなと思っております。会員の皆さん、その際は是非お付き合いたいと思っております。今日は、ジョイセフの佐藤様と栗林様がこちらにアクセスしております。本日は、よろしく願いいたします。

### ■幹事報告

須藤正樹幹事

- 国際ロータリー日本事務局財団室：RI日本事務局財団室NEWS2022年3月号
- 国際ロータリー日本事務局業務・IT室：水と衛生月間リソースのご案内
- 国際ロータリー日本事務局経理室：国際ロータリー日本事務局経理室より2022年3月RIレートのお知らせ
- ガバナーエレクト事務所：3月12日・13日会長エレクトセミナー（PETS）についてのご連絡
- (株)オクトン：カタログ送付のご案内及び商品価格の改定について

### ■本日のプログラム

国際奉仕委員会担当例会

ゲスト卓話

○「公益財団法人ジョイセフ」

佐藤幸子様

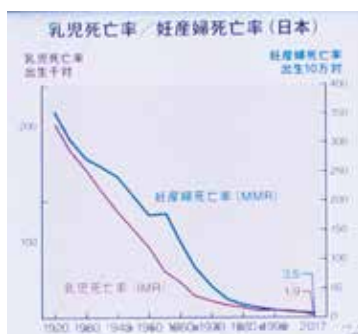


皆様、今日はどうもありがとうございます。お忙しい時間をいただきまして。わたくしは「公益財団法人ジョイセフ」の佐藤幸子と申します。まず最初に、私のほうから簡単にジョイセフの説明をさせていただきますと思います。ジョイセフなんですけども、



1968年に設立しました日本生まれの国際協力NGOです。設立当初よりも世界の女性の命と健康を守る、そういった活動をして

しております。女性たちがより良く生きるために、女性自身が自分で自分の人生を選択できるようにということを考えて活動しております。そのジョイセフが取り組んでいる課題なんですけども、SDGsの3のすべての人に健康と福祉を。それから、5のジェンダー平等を実現しよう。そして、17のパートナーシップで目標を達成しよう。この3つを中心に活動しております。そのジョイセフの取り組む課題なんですけども、1日に808人の女性が世界中で妊娠や出産に関することで亡くなっています。そのほとんどが開発途上国の女性たちです。また、15歳から19歳の少女の主な死因ともなっています。その背景にありますのは、貧困であったりとか、早すぎる結婚であったりとか、それから文化の違いなど様々な背景があります。でも、それは日本でも実はそういう状況がありました。特に、終戦後すぐには人口爆発ということで沢山の出産、そして人工妊娠中絶などが行われまして、女性たちの生命が脅かされるような状況がありました。それをわずか10年ほどで解消したというか、下げたという世界にも類のない速さでの改善でした。そのノウハウを途上国に移転してほしいということでした。では、何故日本でそのようなことができたのかと聞いてみると、そこには地域の女性たち。主に、助産師さんを中心とする女性たちの活動があったんですね。日本はご存じのように戦後、インフラの復興など凄いスピードで行って来たと思います。ただ、それだけでは妊産婦死亡という日本全国隅々までの人々の命を急速に改善するというのは難しいことだと思います。どのようなことを行ったかと言いますと、村の村長さんであったり、お姑さんであったり、あるいは女性たちで集まってもらって、妊娠出産がいかに大変なことであるか、人工妊娠中絶を防ぐためにも避妊がとても大切であるなど、いろんな情報を知ってもらう。そして、自らがお嫁さんであったり女性たちの命を守ろう、そういう行動を変えるようなことを行ってきました。そのことが、妊産婦死亡率を急激に下げる要因だったと思われます。そして、途上国にそのノウハウを移転したということ



があります。ジョイセフは現在では、国連や国際機関、それから現地のNGOや地域の住民と連携して、11か国で現在プロジェクトを実施しております。これまでに、延べ35か国で実施してまいりまし

た。その活動が認められて、国連人口賞やまた第一回の「SDGsアワード」特別賞なども受賞しました。2011年からは、これまでの海外だけの支援だけではなくて、東北の震災を機に日本国内の活動も展開しております。熊本地震であったり、西日本豪雨災害であったり、そういった所に地域の住民、助産師さん、医師会、行政などと連携をして活動をしています。女性たちの何が困ってるかということを中心に支援できるような活動を行っています。その他にも、若い人たちの啓発事業なども行っています。ジョイセフの活動をまとめて見ますと、この図のようになっております。妊産婦死亡の削減するためにということで、例えば人材育成というのは、先程の昔の日本の話がありましたように地域のボランティアを育成してるんですね。村々に行って、やっぱり妊娠出産大変だから自宅分娩じゃなくて施設で分娩しようよとか、そういったことを促したり、重ねて出産するのは本当に大変だよといった話をしてもらえようような人材育成をしています。その他に、診療サービスであったり、物資供与。いろいろなものが不足しておりますので、医療に必要な物資などを提供しております。それから、施設改善。これは施設そのものがなかなか老朽していたり、水道がないとかそういったこともあります。そういったことを改善するようなことも行っています。そして、今日話をさせていただきます教育支援。これは教育支援といっても、それが女性たちの命を助けることに繋がるということになります。このことについては後程、栗林から詳しく説明をさせていただきます。ジョイセフの活動は、図にするとこういう形なんですけど、何がポイントかといいますと常に人なんです。人とのネットワークを築くということなんです。住民だけが気持ちを変えても駄目ですし、物だけがあっても駄目なんです。住民の気持ちが変わって、そして物を供与されて、それを使う専門家であったり、あるいは地域の行政であったり、地域のNGOであったり、そういったいろいろな人たちが共にコミュニケーションを築けてネットワークを築くということはとても重要です。そのネットワークを築くということをジョイセフがやっております。先程、ミャンマーのお話がありました。ジョイセフでも、実はミャンマー支援をずっと行っております。ミャンマーでは、先程の保健ボランティアの育成や、それから保健スタッフ、クリニックの運営など、そういった事に支援を行ってます。そして、クーデターが起きた後も現地とのやり取りをしながら活動を続けています。今、具体的にはマスクとかそういった医療資源を提供したり、それから本来は国がやるべ妊産婦さんのビタミン剤とかそういった配布も、国ではなかなか出来ない状況ですので、私達がプロジェクト地域で実施しております。現在、ホームページのほうで詳しくミャンマーの現在の状況というのをお知らせしておりますので、もしお時間がありましたらここに書かれてありますQRコードやURLで見ただければなと思います。ちょっと駆け足になりましたけど、わたくしから簡単にジョイセフの説明をさせていただきました。ではこの後、栗林よりランドセル

についてご報告したいと思います。

○「公益財団法人ジョイセフ」

栗林桃乃様



それでは、わたくしから思い出のランドセルギフトについてお話をさせていただきます。改めまして、わたくし「NGOジョイセフ」の栗林桃乃と申します。どうぞよろしくお願いいたします。わたくしからは、思い出のランドセルギフトのお話ということで、

まず思い出のランドセルギフトとはというお話なんですけれども、2004年に活動を開始しておりまして、日本での役目を終えたランドセル、またこの度皆様からお預かりしたランドセルをアフガニスタンの子供たちへ送る活動でございます。アフガニスタンの子供たちについて少しお話をさせていただきます。アフガニスタンで学校に通っている子供たちの割合なんですけれども、男の子で7割、女の子では5割。その中でも卒業できる割合は、男の子で7割、女の子では4割に下がってまいります。女の子の半数は、学校に通い続けることができず、また入学してもそのうちの半数以上が卒業することができないというのが現状でございます。では何故、女の子は学校に通えないのかというお話でございますが、先程佐藤からもご説明がありましたが、こちらのアフガニスタンでも背景としては同じような事が起こっておりまして、貧困、早婚、治安ということが挙げられます。貧困で学校に通うための学用品が十分に買えず、男の兄弟が優先となってしまい、また12歳から13歳という若すぎる結婚や出産を経験することもあります。また、学校に通おうと思っても紛争やテロ活動による治安の悪化により、女の子が安全に通学することができないといった状況があります。そのような状況にあるアフガニスタンの子供たちに私たちがランドセルを送る理由でございますが、特に女の子が学校へ通えるきっかけとなり、学校へ通うことが将来自分や家族の命と健康を守ることに繋がり、そして日本の子供たちからの応援が勉強を続けて夢や希望を叶える勇氣になってほしいという思いからこの活動をしております。「NGOジョイセフ」は現地のアフガン医療連合センターと連携し、30



年以上テロ活動や紛争に苦しんできたアフガニスタンのナンガハール州という農業地域でランドセルの配布活動を行っております。これはパキスタンとアフガニスタンの国境にあるカイバル峠です。日本から船でパキスタンへ送られ、陸路でアフガニスタンへ運んでおります。ラン

ドセルは支援者の皆様から、一緒に送っていただいた新品の文房具やお手紙と一緒に現地で均等に分けられ、また安全の輸送のため何が入っているかわからないように丁寧に袋詰めにして各学校へ運ばれております。普段子供たちなんですけれども、このようなレジ袋や布に教科書や軽食を包んで学校に通っています。配布の際は、子供たちに一人一つずつ現地のスタッフや先生からランドセルが手渡されていきます。手渡されていく時には、そのたびに子供たちからは拍手がワーツと湧いたり、笑顔が見られたりといった光景が見られます。また、ランドセルはこのような青空教室も、校舎も教室もない状態で勉強する子供たちの机代わりとなっています。女の子にも男の子にも、このように同様に配布され子供たちの学びへの活力に繋がっております。普段このように子供たちが遊ぶ様子は、本当に日本と何も変わらない風景なんですけれども、このような場所にもこういった戦いの痕跡が残っております。こちらは戦車があるんですけれども、使った後の戦車の上に子供たちがこのように乗って遊んでいる様子です。こういった環境の中で、色鮮やかなランドセルを男の子たちと同じように女の子も背負って、こう笑顔で学校に通う姿がご両親の女子教育に対する消極的な意識を変えることにも繋がっており、ランドセルを背負って学校に行くのが楽しみになった子供たちは、勉強を頑張るって将来の夢を描き始めてるわけなんですけれども、このようにランドセルを背負って両手を開けて通学できることによって、この姿を大人たちが見て、このように楽しそうに学校に通うのであれば自分の子供にも通ってほしいと是非思っていただければと思っておりますし、こういった戦いの跡が残った地域でも、こうやって最低限両手を開けて通学することができれば、安全に通学できる確率というのも上がってまいります。ランドセルを実際に受け取った子供たちのその後について少しお話をさせていただきますが、このように学校の先生になりたい、お医者さんになりたいと夢を語ってくれる子供たちもいます。実際に2004年に、ランドセルを送ったワヒドゥラさんという方がいらっしゃるんですが、2020年には学校の先生として活躍をされておりまして、また同じく2004年にランドセルをお渡ししたりマさんは2014年には大学医学部に入学して、今は研修医として活躍されています。ランドセルを貰った当時は、嬉しくて枕元に置いて寝てくださったそうで、その後もランドセルはこういった弟、妹たちに引き継がれて皆さん学校に行く意欲に繋がっていったと聞いております。現地だけではなく、この活動に参加した日本の子供たちなんですけれども、卒業後ランドセルを寄贈したことで、アフガニスタンや紛争地、平和について興味を持った。ボランティアに積極的に参加するようになった。学校で調べたことを発表したり、SDGsについて考えるようになった。物を大切にするようになった。また、アフガニスタンの子供たちへお手紙やこうした絵を描いて自分でランドセルを送る準備をしたりといった、こういった事を通じて海の向こうの誰かを考えるきっかけとなって、視野が広がったというお声もいただいております。また、この

活動については2020年度より小学校4年生の国語の教科書にも取り上げていただいております。直近の活動のご報告でございますが、2021年の春から夏頃までに回収された約7000個のランドセル。こちらが2021年10月に、かつては争いによって立ち入りが禁じられていたレッドゾーンと呼ばれる地域で配布が行われております。今回は、子供たちとその家族へ手洗いに関する情報を発信するリーフレットと一緒にランドセルを配布したという報告が来ております。ちなみに、色は男女関係なく赤も黒も人気で喜ばれておりまして、日本の子供たちが大切に使用していたようにアフガニスタンでも大切に使用いただいております。こちらの配布で皆様からいただいた暖かいご支援で、2004年から2021年



までの18年間の通算で、

24万8188個というかなり多くのランドセルをアフガニスタンに送ることができております。では、わたくしからは以上で活動についてのご紹介を終わりにいたします。ありがとうございました。

#### ○佐藤幸子様

ありがとうございました。もしご質問など、もしお時間があるようでしたら承りたいと思います。いかがでしょうか。アフガニスタンではタリバンが政権を握って、本当に配られているのかどうかとご心配になっている方もいらっしゃるかと思いますけれども、実際に昨年の10月、そして今2月ちょうど配布をしております。昨年の秋の時に、タリバン政権から地域で活動しているNGO、ユニセフさんとかも含めて呼ばれまして会議が行われて、私たちの行っている活動は良い活動だからそのまま続けてくださいという、一応許可も得ております。ですので、お預かり致しましたランドセルは確実に届けることができると思います。船積みが3月にに入れていただいても、船積み自体は6月以降になります。アフガニスタンの新学期が9月から始まる予定ですので、それに合わせて配布するような計画をしております。

#### ○鈴木孝幸会長

会長の鈴木ですが、よろしいでしょうか。今まで18年間に、24万8千個あまりのランドセルお届けになっているのは、ちょっとびっくりした数字だなと思ったんですが、今まで何度かやはり、佐藤さん、栗林さんとその現地に赴いてランドセルを渡すというような行為は何度かやられたんでしょうか。その時の状況をちょっと教えていただきたいなと思います。

#### ○佐藤幸子様

はい。アフガニスタンという国は、なかなか日本人が行くことができないんですね。プロジェクトがスタートした

のが2004年からなんですけども、実はその前の2001年からジョイセフは活動を現地のアフガン医療連合センターと、現地の女性のための健康クリニックの運営を行っているんですね。そのプロジェクトを2001年からスタートして、その最初の年にはジョイセフの男性スタッフ二人が現地に赴きまして、そして現地を視察してスタートしたということがあります。2004年にランドセルを配布した頃には、こちらからビデオなどの器機を提供しまして、必ずビデオ、それから写真等で報告、それから報告書もいただいております。ですが、実際に女性がアフガニスタンに行くということ自体が、このジョイセフ内でも許可が下りませんで、誰も行ってはいないんですね。代わりに、その現地の医療連合センターのトップのセンター長に毎年日本に来てもらってます。日本でプロジェクトの計画等を立てながらやってっております。ただ、去年はコロナの2020年、2021年はコロナの影響で来れてないんですけども、こうやってオンラインで話をしたりとかしております。アフガニスタンの人たちは、本当に日本人と気質が似てるというか、とても真面目で他の途上国とは比べ物にならないぐらいに報告を送ってきます。動画であったり、それから写真であったり。報告書もかなりきちんとしたもの。どこのどの学校にランドセルを幾つ配布して、その学校には何人の子供たち、女の子の子がいるという、そういうデータも上がってきます。もともとランドセルを配布するにあたっては、その現地のNGOが現地の配布しようと思う地域の教育省であったり、学校と相談して子供たちのデータを貰って、そして大体1年生から3年生までに均等にランドセルが配られるように。ランドセルの中に平等にいろんな学用品を入れるようにということで、計画を立てて配布をしているので、私達日本人が行かなくても本当にきちっとした報告がなされてるなというふうに感じております。

#### ○鈴木孝幸会長

ありがとうございました。わたくし先程の会長に一言で、出来れば現地になって思ったんですが、やはりイスラム圏だとなかなか女性も入れなかつたり、なかなか難しいところもあるかと思うので、良かったらその日本に報告に来られたそれを、コロナであればこういった形でズームとかで、ないしはコロナがうまく解決していれば、是非現地に赴いてそうした報告を聞きたいなと思います。我々で集めたランドセルは、小学生用のランドセルと中学生用の大きいランドセルなんですけども、24万8千個のうちの仲間入りをさせていただきたく、その行く末を見守っていきたいと思います。今後共、ひとつよろしく願いいたします。

#### ○佐藤幸子様

はい、ありがとうございます。報告は必ずさせていただきたいと思っておりますし、配布の様子などが伝わってきましたら、今年の秋以降になると思うんですけども、またご報告を是非させていただきたいなと思っております。コロナでなければ本当毎年、現地からセンター長が来るので、その

人と一緒にこうやってお世話になった方々へご挨拶に行ったりもしていたんですね。本当にコロナがなければというのが出てしまうんですけども、コロナが終息しましたらまた現地からお呼びして皆様にご挨拶をしたいなというふうに思っております。是非、これからもよろしく願いたします。

○鈴木孝幸会長

よろしく願いたします。佐藤さんですね、青木大会員とメールのやり取りの中で、なんか10分くらい何か報告を削除した内容ございましたよね。

○佐藤幸子様

ああ、それはそうです。現地の様子の動画だったりとか、それから現地のその今言ったセンター長のババカルキルさんから動画が来てるんですね。それがちょっと7分くらいで長いので、それを流してしまうとちょっと話が全部できないなということで、もしよろしかったらその動画だけお送りすること出来ますので、後日ご覧になっていただければ、センター長がこんなことを話して現地のこと説明してるんだなというのが、もしかしたら御覧いただけるかなと思いますので、いかがでしょうか。

○金田昇会員



金田と申します。よろしく願いたします。今回の事、ランドセルを運んでいただいてありがとうございます。ちょっとした疑問なんですけども、ランドセルを送ったりする送料とか輸送費とか、いろんな経費がかかると思うんですよ。物を集めりゃいいっていうことでは済まないと思うんですが、ジョイセフさんのほうでその他の経費などの寄付とか、そういうふうな資金調達面において何かご苦労なさってる場所があるのかということが一つと、それともう一つ、他に私たちのロータリー以外のロータリークラブとか、そういうふうな主な支援団体などがありましたらちょっと教えていただいたり、その取り組みとか関係性とかというのも簡単にご説明していただくと、これからそのロータリークラブ、私たちも含めたところへの広報活動とかにも使えるのかなというふうにも思いますので、ご寄付の件、それから経費の件ですね。それと、他のロータリークラブなどとの関係についてご説明いただければと思います。

○佐藤幸子様

ありがとうございます。資金についてはまさにそのとおりで、その点は気付いていただくのは大変ありがたいなと思います。今回もといいますかランドセルについては、ランドセル1個につき1,800円の海外輸送費募金というのをいただいております。そして、今回も貴ロータリークラブさんからもその資金をいただくことになっております。そういった皆様方に募金をいただきながら実施しております。

ロータリークラブさんとの兼ね合いということですけども、ロータリークラブさん、それからライオンズクラブさん、様々な所の地域の方もご協力をしていただいたりしております。毎年、ご寄付をいただいているロータリーさんや、ライオンズクラブさんなんかは、ジョイセフのホームページの支援団体というか、パートナー企業、パートナー団体という形でお名前を載せさせていただいて広報させていただいております。大きな企業様では、例えば日本郵船さんとか、ランドセルではなくてお金の寄付をしてくださったり、他の企業さんでもランドセルを送るというような活動をしてくださってる大きな電機連合さんという組合さんとかありますけれども、それ以外には本当にそれだけではお金が大変だろうということで、お金を提供してくださっている企業さんなどもございます。一応ホームページのほうでは、そちらの主にも協力してくださっている方々のお名前は載せさせていただいております。では、動画の用意できましたのでよろしいでしょうか。じゃあ、ちょっと共有させていただきます。

～～アフガニスタンのババカルキルさんの動画の上映～～

○佐藤幸子様

今、中学生用ランドセル107個は布製となっておりますがということなんですけど、布製のランドセルは基本確かに受け付けてないんですけど、今回個数が多いのでそれをそのままお送りさせていただこうと思っております。一番気にしているのは、一人だけ違うものがあるというのは子供たち可哀そうだなと思うので、数が多い場合には送るようにしているという状況です。

○鈴木孝幸会長

はい、それでは佐藤さん、どうもありがとうございます。本当に興味深いビデオ、心温まるちょっと目頭が一瞬熱くなってしまったと思います。どうもありがとうございました。送る際には、青木大委員長を窓口継続的にまたご連絡申し上げますので、よろしく願いたします。

■委員会報告

○親睦委員会

石川格子会員

・誕生日

矢田部錦四郎会員、佐藤幸彦会員、佐川京子会員  
櫻岡敏之会員

・結婚記念日

片倉義文会員、佐川京子会員、松永紀男会員  
吉成真五郎会員、藤田和克会員、沼田重一会員

○鈴木孝幸会長

4回続いた100%ズーム例会も、来週は無事に今までどりのハイブリット例会に戻る目途が立ったと思います。来週は、皆様の顔を生で拝見いたしますのを楽しみにしておりますので、よろしく願いたします。